

真杉静枝の広州訪問とその叙述の表裏

はじめに

広州と深いかわりを持つ作家のなかでは、一九二〇年代嶺南大学（現・中山大学）に留学し、その時から詩人としての第一歩を踏み出した草野心平^①、日中戦争中従軍作家として「南支那派遣軍」についていち早く広州入城を果たした火野葦平が最もよく知られている。葦平は入城後、陸軍報道班員として活動し、雑誌「へいたい」の編集長をつとめ、兵隊三部作（『麥と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』）に続く「海と兵隊」を『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』に連載し、さらに改題して『広東進軍抄』（新潮社、一九三九年）を発刊した。また近年、事実に基づき記した葦平の「広東作戦『従軍手帳』」が増田周子によって翻刻されたこと^②で、葦平の広州とのかかわりがより一層広く認識され

るようになった。

駐在する男性作家の火野葦平と異なり、短期間の滞在中女性の目線で広州を見つめ、占領下（一九三八―一九四五）の広州を記録した女性作家として真杉静枝（一九〇〇―一九五五）がいた。真杉は、中日全面戦争が勃発した後、『輝ク』の同人である長谷川時雨、平林たい子などと共に、積極的に日本政府の呼びかけに応じて文化宣撫をして戦争に協力的な活動をしてい^③た。一九四〇年、陸軍省報道部の「南支那派遣軍慰問団」に仲間入りして、久米正雄、中野実、文芸春秋社編集吉川晋（吉川英治の弟）と共に二月二五日に広東に着き^④、宣撫工作に参加し、現地の日本人軍民、中国人と接触した。その一〇日間ほどの滞在中、真杉が見聞きし、感じたことを記した文章は、のち『南方紀行』（昭和書房、一九四一年）の「広東春日記」部（紀

鄒 双双

行文「広東春日記」と区別するため、以下『広東春日記』で記すに収録された。広東とはいえ、真杉が実際に足を踏み入れたのは広州及びとなりの佛山のみである。『広東春日記』は「烏秋」「広東春日記」「二つの都」「広東手記」「国際結婚」「佛山へ行く道」「私の慰問文」「船室にて」を収録する。うち、「烏秋」だけは小説で、その他は紀行文カルポルタージュの類である。

台湾経験を描く作家という位置づけであるためか、従来の研究では、その広州訪問にまつわる上記の『広東春日記』はあまり注目されなかった。「烏秋」に焦点を当てた論考はあるものの、それを「台湾物」として扱っている。確かに、「烏秋」は台湾を舞台とするものである上、真杉自身が台湾と深いゆかりを持つため「台湾物」として読まれるのが自然である。しかし、『南方紀行』の「台湾の土地」部ではなく「広東春日記」部に収録されており、しかも一番前に配置されている以上には、「烏秋」は「広州」というアプローチから読む可能性が秘めている。本論は、『広東春日記』を手掛かりに、真杉静枝にとって広州訪問とはどのようなものだったのかを確かめ、「広州」というアプローチから「烏秋」を読み解く可能性を模索してみる。

一、日本の広州進出史における真杉静枝の広州訪問

広州は「中国の南の出口」と言われる。自然的好条件に恵まれ、物産が豊富で、交通も至便で、古くから商業が発達し、商港の数も多い。秦の時代から華南地区の政治、経済、軍事、文化の中心としての役割を演じながら、対外貿易の重要な商港として大きな役目を果たしてきた。特に清中国が鎖国政策を実施して以降、広州は唯一の通商港となり、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスなどの国と貿易し、対外貿易で繁盛を極めていた。⁵⁾アヘン戦争後、対外貿易上の条件は香港に比べて遜色があったが、依然として中国南部の最大商港として地位を失うことなく、「商業都市」「消費都市」として名高かった。⁶⁾

西洋各国に比べ、長きにわたり鎖国政策を実施していた日本は広州への進出がやや遅れた。一八八八年に在広東領事館が設立されたが、領事館へ登録に来た日本人はわずか三人で、一八九〇年に登録者は増えたが、一二人と、それでも多くなかった。一九〇七年から第一次世界大戦初期まで、在広州日本人が二〇〇人台で横這いし、一九三〇年には五〇〇人を超えた⁷⁾が、主に大手商社、銀行、海運業会社、小売業に集中し、ビジネスチャンス目当ての人が多かったという。⁸⁾日中全面戦争が始

また後の一九三七年二月、台湾総督府の調査によれば、「在留邦人数は内地人四百十六、臺灣人百七十四、合計五百九十人であった」という。そして、上海、武漢などに次ぎ、日本軍に入城・占領された一九三八年末、時局のため一時入港を禁止された日本庶民が自由に広州に渡ることを許可されたのにしたがい、日本人がまた増加し始め、日本内地人、朝鮮籍、台湾籍を含めた居留民が一〇〇〇人を超えた。日本内地人だけを見ると、一九三九年に四〇〇〇人に増え、一九四〇年一月に約六〇〇〇人に上り、一九四一年一月頃最盛期を迎え、九〇九四人に達し、一万台に迫った。また、占領した後、日本は、広州を「政治的には重要な地位」として「大東亜共栄圏」の一環に組み、政治的協力体制を確立する傍ら、文化面においても協力体制を確立しようと、「南支日報本社」「香港日報支局」「毎日新聞社支局」「朝日新聞社支局」「読売新聞社支局」などの日本新聞社を設置し、『新亜』『南星』『婦女世界』『児童楽園』や協栄会印書館を有する共栄会を設立した。文化界に属する作家、画家、音楽家も広州に姿を現し、それぞれの手法で占領下の広州を描く「広州物」を作りだした。うち、漫画家村山しげるの『広東瑣談』（輝文館、一九四一年）、久保健二の『広東珠江』（東亜書林、一九四二年）のような風物記や案内書は少なくないが、

文学者の筆で書いたものは少ない。前述した輩平のもの以外に、真杉静枝の『南方紀行』もそれにあたる資料である。したがって、女性作家の視点から日本占領下の広州を見ろという意味でも真杉静枝の『南方紀行』を取り上げる価値がある。

二、真杉が叙述した広州中国人…同時期の叙述と比較して

『広東春日記』によれば一〇日間にわたる訪問の日程について以下のようなことが確認される。一月一日に来賓として日本軍司令部が中山記念堂広場に行われた皇居遥拝式と「広東省児童軍検閲礼儀式」に列席し、一月二日に吉川晋とともに佛山駐在の部隊を訪問し、一月三日に広州より台湾へ引き返す。また『新亜』の報道によれば二六日午後、「日本文芸視察団座談会」にも出席した。日本側の出席者は視察団の四人以外に、広東共栄会主事井上正男、大阪毎日新聞広東支局局长三原信一で、中国側は広東教育庁長林汝珩、広州市教育局長何惺常、広東大学教授数名である。同年十一月に汪兆銘政権が日本と「日華基本条約」を調印したことに合わせて、座談会が同条約の第一、二条の文化融合と発展の問題をめぐって議論したという。⁽¹³⁾ 真杉はその座談会のことを「もちろん情熱をもつて語り合はれた」

(五一頁)と書いたものの、発言が少なく、自分の作品を広東方面に訳してもらっていいとの意向を示しただけである。座談会の議題に関してさほどの考えがないとうかがえる。上述の活動のほか、軍部や報道部の関係者と面会し、各種の文化施設や、中山記念堂、六榕寺、沙面、広東大学などの観光スポットを見物し、町を歩き回った。

「澤山な、切ないほどな感慨あふれる廣東滞在であつた」⁽¹⁴⁾と真杉が「広東春日記」で書いたように、広州が彼女に与えた感慨と感動は、並たいていではなかった。真杉文学は同じ内容が繰り返し書かれる特徴が見られる。それは文学評論家の指摘の的になっているが、繰り返し書いて書いた部分こそが感慨・感動の多いところだと読者に伝えることにもなる。文中、真杉は幾度となく「荒涼」で広州の街並みを形容している。「戦いに敗けた荒涼とした眺め」「累々たる廢墟のつらなり」といった荒涼ぶりを記した真杉の言葉は当時の広州の実情である。一九三八年五月から日本軍は、続々と広州を空襲、市街に爆弾を二六三〇枚投じ、死者を一四五三人、けが人を二九二六人出し、家屋を二〇〇四軒毀損したという。空襲に見舞われた文化人夏衍が「広州は空襲中」で「この世は何世だ？」と怒りをぶつけ、作家巴金が一九九五年に出版された『巴金訳文全集』(第

一卷)の跋で広州で「百回も空襲を受けた」ことを振り返るほどであった。⁽¹⁵⁾荒涼たる地に暮らしている広州市民について、真杉はこのように感じた。

人口はまるで、この町にあふれきつてゐて、やりばがないといった感じに、人がうごめいてゐる。

氣ほひたつたうごめきといふのではなく、力が、なにか地の底にひそまつてしまつてゐるやうな、ゆるい、やり場のはつきりしないうごめきが、この町の民衆の上感じられる。

敗戦の刹那の衝撃から、この人々はまだはつきりと魂の蘇生を呼びもどすことができないのでもあるやうな、しかし、町々をかためた日本軍の歩哨の前をとほる時の脱帽をする姿のうちには、なにか現實をはつきりと安堵をもつて納得したやうな、そんな楚々としたゆらぎも、こちらの主観であるかもしれないが感じられる。(六一頁)

日本の支配下で恥を忍んで生活する市民の精神状態を鋭敏に感じ取つたのである。とりわけ広州市の中を徘徊している約五万人の乞食について、真杉は「広東春日記」で細かく描いた

ほか、「広東手記」にも文字を連ねた。「広東春日記」では、

企業面の、まだはつきりとは整はない町の中に、實におびただしい乞食の群がある。ある町では、停仔脚の下に、乞食の姿があふれてゐるやうな印象をうけた。

珠江のゆつたりとした濁水の流れに面した十五層樓「愛群ホテル」の前あたりは、乞食の聲と、珠江を渡航して、香港方面へでようとする民衆の、寄せ集つたさわめきとで、耳がふさがるほどのやかましさである。

乞食達は、てんでに穴のあいた鍋とか、割れた茶碗などを、通行人に突き出して哀れみをせがみかかる。やらずにはゐられない感傷が旅行者の心に押し迫る。何氣なく一枚の軍票をその割れ鍋の中に入れてよものなら、たちまち他の貫はなかつた割れ鍋の手で、その旅行者は、押し倒されるほど襲はれる。

不潔きはまらない、彼等の姿！割れ茶碗に、何處かでもらつた残飯を入れて、往來のほこりまみれの土にそれを置き、哀れな里芋みたいによごれた瘦せた母親や、幾人もの子供が、その残飯を手でむさぼりたべてゐる。空の輝きも、そのまはりの、怒濤のようなめまぐるしい人通りも、その

母子の眼には入らない。お腹の空いた悲痛な顔であつた。
(四五一—四六頁)

真杉の精緻な描写が読者に訴えるものがある。内地で衣食に憂いなく生活してきた者として、凄まじい乞食の群れに愕然としたと推察される。また、子どもも真杉が度を重ねて書いた対象である。元旦の朝、真杉は中山記念堂の広場で行われた軍司令部の皇居遙拜式に参加し、それが終わった後の「広東省童軍検閲礼儀式」も参観した。その場面について「二つの都」と「広東手記」で叙述されている。「この子供達は、つい二年前、眼のあたりに敗戦の苦辛を見てゐるのである。敗残兵の暴虐にあつて、發狂した母親もすくなくないといふことであるが、それほどの大悲劇に打ち叩かれたばかりの子供心を思ひやつて、私は、痛々しい思ひにかられるのであつた。」(八九—九〇頁)また子ども達が「氣力の薄い、低い歌聲で」歌つた国歌を聞くと、「私達は「君が代」を唱ふ時の、あの張りきつた感動に慣れてゐる心で、瞬間、この氣力のスポイルされてゐるやうな、合唱の中に、異様なもの、哀れなもの、こも／＼のものを感じとるのであつた。」童軍歌の合唱となると、子ども達が、「なほさら、氣力を見出すことはできなかつた」、「どの顔も、まるきり元氣

のい、血色といふものをとり落としてゐる」(九〇―九一頁)。
真杉は子どもたちから「痛々しい思ひ」「異様なもの」「哀れなもの」を感じ取った。女性にして生まれつきの母性と感性が働いた描写である。

このように、真杉は戦争を経た広州の町並みや、占領下の人々の生活・精神状態を記した。比較のため、同じく一九四一年発行の前掲書『広東瑣談』にも触れてみる。『広東瑣談』は著者村山しげるの「序」によれば、「南支那派遣軍報道部の對支宣傳班へ(略) 従軍した半歳の間に、見たり聞いたりした廣東のことを(略) 南支に活躍してゐられる兵隊たちの銃後の家族の方々へ、多少なりとも廣東が紹介出来ませれば」という目的で出版されたのである。内容を確認したところ、真杉のような「荒涼とした眺め」「累々たる廢墟」「不運な戦争の子供」といったような表現が見当たらず、乞食に関しても客の要望に応じて曲を聞かせる盲目の芸者が転落して乞食になったことしか記されていない。それどころか「今、廣東の屋根の下には、皇軍の鐵壁の守りにより、市民は安居樂業にいそしんで居る」(同書一頁)とさえ書かれている。広州を美化して書く『広東瑣談』より、真杉の『広東春日記』はありのままの広州の様子を日本内地の人々に伝えたと言える。

二、真杉静枝が叙述した広州日本人

戦争の広州に残した無残な痕を目の当たりにして度々「哀れ」を發した真杉だが、戦争の全容と真相をつかめていなかった。「累々たる廢墟のつらなり」を見て、真杉は「これは敵の焦土戰術のやつた火災のあとですよ。このへんは、ほとんど、日本軍は爆撃はしませんでした」(四三頁)という説明に納得し、「壞れながらもなほ美しく、傷つきながらもなほ、鈍感に執着づく、生命の息吹きを忘れない。こんな大陸の風土的な性格を、この一幅の景色が私達に説明してゐるやうである」(四四頁)と書き、一種のロマンさえ感じた。乞食の様子をしばしば描いたが、それが現れた根本的な原因について言及しなかった。そういったところからは、戦争に対する認識不足が真杉にあったことがわかる。さらにそれが原因で、後述するように広州における日本人の活動を過大評価した。

真杉は広州の隣の町佛山に陣中見舞いに行った。「その作戦地帯で見受けた兵隊さん達の生活には、日頃私などが想像してゐるのはちがつた苦難な面が感じられた。そして、そのことは、私にとっていろいろな意味の大きな感動となつた」(一〇四頁)という。翁英作戦、賓陽作戦の血生臭い作戦実態

を知った後、新聞記事の戦況ニュースの活字にいくらか感動を見失っていた自分を反省するような文字を綴った。また、内地の物資不足を気にかけて、慰問袋より内地の様子を伝える手紙のほうがいいという兵隊たちの話を聞くと、真杉は「はじめてじつくりと心を噛むやうな切なさで」、「心に座った。」(六六頁) 真杉は兵士たちを通して戦争の実態と戦争に身を投じた人たちの高い覚悟を知ったようである。そして女性の立場から戦争における女性の思いを思いやった。「私の心には、こんな土地に良人を置いて別れて歸る妻の心や父をここに置いて立ち去る娘の心、ここで息子に別れて歸る母の心などをひとつにした、あらゆる女性の感情が沸き上がって、涙が出てならなかった」(一一五―一一六頁)という。同じような文字が「私の慰問文」にも綴られた。

女性が故に、女性の気持ちを思いやる。女性が故に、女性の生きように目を向ける。「国際結婚」では広州で中国人と国際結婚をした日本人女性が、時局に影響されて軒々と亡命する話を、「船室にて」では子持ちで、最初は東京でダンサーをしていたが、ホールが閉ったため、広東に渡りタイピストをした女性の身の上話を書いたように、真杉は広州の日本女性の姿を追っていた。ただ、「日語講習」に通っている「若々しい、美しい」

娘さん達を代表とする中国の婦人達が「實に楚々として、復興的で気持ちがよくった」(九四頁)と感じたのに反し、日本人女性を「戦争の被害者」として見ている。鮮明な対照をなした捉え方である。

とにかく外地で過ごしている兵士と日本女性と接して、「すつかり國へかへつてからの仕事の居住居をつくりなほすことができたような気がする」(一一七頁)と言ひ、真杉は日本人としての自覚がこれまで以上に高まった。このような内省と自覚は、広州を復興させる切迫さと必然性を意識させた。宣撫工作が困難を極めると聞いたが、「町には青年や處女達の、若い親日的な雰囲氣が随分みうけられる」。「日本人の「すし屋」「うどん屋」などといふ看板が、場はづれな感じで掲げられてゐる街が眼につくが、その附近には、臺灣の總督府からの派遣で設立されてゐる「共榮會」の「親華劇院」といふ映畫館も田中絹代、長谷川一夫などの繪看板をかかげてゐる」。「レコードの李香蘭や日本人歌手のきれいな唄聲が流れ出てゐる」(七三頁)とあるように、真杉はこれらを一種の成果と根拠とし、「もうぢき、皇軍協力のもとに、この町の治安が完全に回復することであらうし、この不運な戦争の子供の心にも、新しい秩序への國家的な胎動が充分にしみこむことであらう」(九一頁)、「乞食の群

も姿をひそめてしまふやうな手だてが見つけ出されることであらう」(九三頁)と書いた。

前節を踏まえて考慮すれば、真杉は、戦争がもたらしてきた「廢墟」「乞食」「不運の子ども」に同情的な眼差しを注ぐ一方、日本兵士や日本女性の生きように感動し、復興の未来を信じ、一日本人女性としての覚悟を強めたようである。

三、「烏秋」から見る広州叙述の裏

「烏秋」は「東京を發つて、臺灣、南支へと、五十日の繪を書く為めの寫生旅行」をする女主人公の桐野八重が、東京に戻る前に「南支」から台湾南部に立ち寄って両親と妹一家を訪ねる様子を描いている。台湾での日本人の生活が中心に描かれているように思われるが、真杉の広州訪問後の心境も点描されている。小説のはじめに、台北に着いたばかりの八重が、崇敬玉という人に贈るために、人力車に乗って町中でゴッホの画集を探す。その時の八重が星の鮮やかな空に心を吸われ、「その夜の空は、妙に彼女の心に向つて、雄辯であつた。空の彼方に、いまひとつ、彼女が見て来たばかりの、別な世界がある。」(四一五頁)この「別な世界」は、いわゆる「南支」、真杉の見た

広東であろう。「その世界のほひが、まだ空にべつたりと塗りついてゐるやうな感動をもつて、彼女の體をしめつけて來ている。彼女は、焼きつけられたやうな、くすんだ切ない思ひで、この切なさを切りぬける」(五頁)ために、崇敬玉に急いで画集を送りたかつた。「さうすることで、いくらか、ほつと出来るやうな氣がした」(五頁)からである。崇敬玉は、「日本人の母と支那人の父とをもつて生まれた若い婦人」で、「敗戦の後の荒涼たる町の民心の間を、支那語で日本軍に協力しながら宣撫して歩いてゐる」(一〇頁)が、夫が戦争で行方不明になり、二人のこどものうち、一人が戦火でなくなつたと造形されている。前節で見て来たように、真杉は広州滞在中、過酷な現実に打ちたたかれて「哀れ」と思いながら、在広州日本人の高い覺悟に刺激されて自責の念を禁じなかつた。画集を探して贈るといふ八重の行動は、まさに真杉の自責から生まれた設定と言える。

第二節では、八重が母に会う。「どうだった?——現地は、大へんだつたでせうね」と聞かれるが、八重は「大變は大變でも、しつかりしさへすればいいんです。誰でもが……」と、「氣取つたやうな、怒つた口の利き方をした。」(一五一―一六頁)八重の怒りには「現地」の現状に対する苛立ちと不満が見え隠れ

している。これも、真杉が予期せぬ厳しい現実に接したあとの心境の表しであろう。

第三節では、八重は妹の働く学校へ行く。そこで、妹の同僚の豊田先生に、もうすぐ海南島の警備隊に入る主人豊田公吉に海南島のお話をしてやってくださいと頼まれて、公吉と会うことになる。「廣東は懐かしいところ」と言う公吉は明らかに廣東で滞在したことがある。公吉に会い、「八重は、見て来たばかりの現地的雰囲気をも、よく人に傳へやうとしながら、いつも言葉に詰まるのであった。言葉はどの言葉も、八重の心にある感動をびたりと云ひあててはできない。けれど、いま、眼の前の豊田さんの姿は、何も言葉を出さなくとも、八重と百時間も話しあつたほど通じるものをもつてゐた。」(二七頁)公吉と共鳴できた八重は満ちたりて、豊田さんの家を辞する。「現地」を経験・目撃したことがない人に心緒を理解してもらえなかつた八重の苦悶は、公吉の出現でようやく解かれたのである。八重の苦悶はすなわち真杉の苦悶であり、「澤山な、切ないほどの感慨のあふれる廣東滞在」に起源するものである。

このように三節からなる「烏秋」は、各節において真杉の広州訪問後の心境を、八重を通して描出している。言い換えれば、真杉は台湾を舞台として「烏秋」を書いたが、広州も常に意識

していた。さらに、小説のキーワードの「烏秋」について考えてみよう。烏秋は第二節から出てくる。八重が乗っている台湾南部に向かう列車の中のある乗客が烏秋に気づき、こう言う。「烏秋、あれは烈しい鳥だ。日本では臺灣にしかゐない。何しろ、空で飛びながら、鷹に挑びつくんだからね。あの小さい體で……」「鷹にとびついたからには、その鷹が口にくはへてゐる獲ものをはなすまでは、挑びかかつていつて、はなれないんだといふからね……」そしてもう一人が言う。「地圖でも解りますやうに、日本はこんなに小さい国であつて、相手の支那大陸は、こんなに国体が大きいんですがね……」(二二―二三頁)また、小説の後半で妹照枝の家族生活が書かれるが、未亡人の照枝が長男と喧嘩して和解した後、「烏秋に似て猛けかれと母ごころ」(三七頁)という俳句を作る。小説の終わりに、照枝は八重に自分の台湾生活を語り、「秋になると、烏秋の姿をみて、さあ、やつぱり、しつかりとやつてゆくのだぞー！つて、自分の心にも叩き込むやうに云ひまかせますわ」(四〇頁)と嘆く。烏秋が登場するこれらの印象的なシーンが、烏秋の象徴する意味を考察する上での重要な依拠である。呉佩珍は前半では烏秋が地政学上の伸介者としての台湾や、欧米諸国や中国と対戦する日本を、後半では台湾に自負する日本移住民を象徴するとい

う見地を示している⁽¹⁶⁾。李文茹は戦争期の日本内地の母親たちを象徴すると考える⁽¹⁷⁾。それらの主張はそれなりの筋が通っているが、広州を考慮に入れなかった考えである。前述のとおり、第二節において、八重は母の質問への返答に戸惑い、怒りさえ見せた。その続きに、「その時、鳥秋が、さつと宇宙に黒い線で刷きたてるやうな速さで飛んでゐた」(一六頁)とある。目の前を飛びすぎたのは鳥秋だが、八重の脳裏を掠れたのは「南支」であり、そこで知り合った崇敬玉らの面影であろう。言い換えれば、真杉はここで鳥秋と広州、広州の人々とを結びつけた。前述した「鳥秋」で現れた広州訪問後の真杉の心境を考え合わせると、鳥秋が広州の人々、ないし戦争に苦しんでいるすべての人々にイメージされたと考えられる。小説最後の「しつかりとやつてゆくのだぞ」は、こういった人たちへの期待である。まとめてみれば、真杉は「鳥秋」で広州訪問後の痛切感、慚愧感、苦悶また動揺といった多種多様な思いをあらわした。紀行文で表出しなかった苦悶と動揺は、「一種かはった、現地的な緊張のみなぎり渡つた」(四三頁)広州から「静かな平和」(四二頁)な台湾に、人力車がより座り心地が良い、言葉が通じる、東京に酷似する台北に引き上げてはじめて現れ出たのである。したがって、「鳥秋」は『広東春日記』シリーズの一篇でなけ

れば、真杉の広州叙述は完全たるものと言ひ難い。「鳥秋」を『広東春日記』の初篇に配置したのは、国民総動員という喧伝と統制の下における真杉の一種の態度表明であると言える。「信念」の動揺が許されない言論環境であつたため、かすかに真の思いを小説に託すしかなかっただろう。実は、この種の苦悶と動揺は、真杉のその後の創作にも見られる。一九四二年、真杉は新潮社特派員として窪川稲子と同行して前線の宜昌に入つて取材し、「花を乗せて」母と妻「婦休三日間」絶対面に立つ人達「死を恐れぬ姿勢」などの小説と随筆を書き、生命への未練と死亡への恐怖を表した。これらの作品に感傷的なものが満ち溢れ、冷徹した窪川稲子の筆致と鮮明な対比をなし、非典型的な「国策文学」と見なされる⁽¹⁸⁾。真杉に動揺が生じた時点を追求すれば、衝撃的だった広州訪問にさかのぼることができるだろう。

おわりに

一九四〇年の広州滞在は、真杉静枝の初めての中国訪問であれば、初めて近距離で戦役を経た直後の都市を観察する旅行でもある。『広東春日記』で見られる真杉の広州記録は、感慨・感動があふれ、女性の繊細な感受性を漂わせており、煽情性が

ある。真杉がそのままの広州の街並みと中国人の生活様相を記録し、一途に日本占領地区を美化する同時期の出版物と一線を画す。歴史を記録する文学資料として価値がある。真杉が、戦争がもたらしてきた広州の廢墟、乞食、不運な子どもを目にして「哀れ」だと思いつつも戦争の実質を認識できなかったこと、駐在する日本兵士と、居留する日本人女性の生きように触れて一日本人女性としての自覚がさらに高まったことが紀行文から容易に読み取れる。他方、「烏秋」からは国家権力に植えつけられた信念と、目の前に突きつけられた真実との間に真杉が動揺したことがうかがえる。これで、『広東春日記』の紀行文と小説は、それぞれ真杉の広州叙述の表（言えたこと）と裏（言えなかった）を成したと言える。「台湾物」の「烏秋」が『台湾の土地』部ではなく『広東春日記』部に組まれたのも理解される。

戦後、広州は目覚ましい発展を成し遂げ、今や中国三番目の大都市として、さらに国家戦略として新しく打ち出された廣東・香港・マカオビッグエリアの中心都市として、華南地区の発展を牽引し、今後のさらなる発展が期待されるであろう。真杉静枝が捉えた一九四〇年冬から翌年春にかけての広州は、広州史の一瞬に過ぎないが、この瞬間から垣間見られたおよそ七年間

の長きにわたる日本占領期の歴史がかつて多くの中国人、日本人に共有されていた以上、そして過去として現在を支えており、忘れるべきではない。

注記・本論で用いた中国語文献はすべて繁体字で表記した。

〔注〕

- (1) 広州時代の草野心平について、裴亮『中国「嶺南」現代文学の新天地——文学研究会広州分会および留學生草野心平を中心に』（花書院、二〇一四年）を参照されたい。
- (2) 増田周子「火野葦平 広東作戦「従軍手帳」翻刻——陸軍報道班員の記した日中戦争」（『戦争と文学 スペシャル』集英社、二〇一五年七月）。
- (3) 呉佩珍『真杉静枝與殖民地臺灣』、聯經出版事業股份有限公司、二〇一三年、九七頁。
- (4) 毛鵝「歡迎日本文藝視察團座談會」、「新亞」第四卷第二期、一九四一年二月一日、五〇頁。
- (5) 程浩編著『廣州港史 近代部分』、海洋出版社、一九八五年、一一六頁。
- (6) 平野健編『廣東之現狀』、南支日報社、一九四四年、一

一二頁。

(7) 張傳宇「抗日戰爭前的廣州日本人群體——以人口及職業問題為中心」、《中山大學學報》二〇一二年第五期、一一九—一二二頁。

(8) 同上、一二二頁。

(9) 臺灣總督府外事部編『南支那綜覽』、南方資料館、一九四三年、八六六頁。

(10) 張傳宇「淪陷時期廣州日本居留民研究」、《抗日戰爭研究》二〇一四年第二期、八二頁。

(11) 前掲平野健編『廣東之現狀』、九頁。

(12) 同上、四八頁。

(13) 前掲毛鵝「歡迎日本文藝視察團座談會」、五〇—五二頁。

(14) 本論で用いるテキストは、全部真杉靜枝『南方紀行』（ゆまに書房、二〇〇〇年）である。引用が多いため頁数のみを記す。

(15) 陳建華編『廣州抗戰史跡圖文集』、廣州出版社、二〇〇六年、四四頁。

(16) 吳佩珍『真杉靜枝與殖民地臺灣』、聯經出版事業股份有限公司、二〇一三年。

(17) 李文茹『殖民地・戰爭・女性：探討戰時真杉靜枝臺灣作品』、

『臺灣文學學報』二〇〇八年第一二期。

(18) 前掲吳佩珍『真杉靜枝與殖民地臺灣』、一〇一—一〇二頁。

(すう) そうそう／(中国) 中山大学外国語学院